様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｈ００６８７

研究課題名（和文）英語教員養成コアカリキュラムの検証と具体的・包括的プログラムの開発

研究課題名（英文）Validation of the National Core-Curriculum for Pre-Service English Teacher Education and Development of its Concrete and Comprehensive Programs

研究代表者
粕谷　恭子（Kasuya, Kyoko）

東京学芸大学・教育学研究科・教授

研究者番号：４０４５６２４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,310,000円

研究成果の概要（和文）：　「小学校教員養成課程 外国語（英語）コアカリキュラム」、「中・高等学校教員養成課程 外国語（英語）コアカリキュラム」で挙げた学習項目と目標について、どのように扱うかをモデルプログラムという形で提案した。モデルプログラム作成のために、コアカリキュラムの先行実施を妥当性・効果の検証、大学教員対象のアンケート、大学教員への聞き取り調査、各大学のシラバスの検討を行った。
　これらの調査をもとに、包括的なモデルプログラムと具体的なモデルプログラムを報告書としてまとめ、要諦を抑えたパンフレットを作成し、教員養成課程を持つ大学に送付した。また、応用言語学の世界的な学会であるAILAにおいて発表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
英語教育改革の実現のためには、小・中・高の各校種で教鞭をとる教員の果たす役割が大きいことは言を俟たない。養成段階で学習するべき項目と目標を挙げるにとどまらず、教育実習や英語力の伸長等について具体的なアイディアを示した包括的なモデルプログラム、各項目をどのように工夫して授業で扱うかを示した具体的なプログラムを作成した意義は大きいと考えている。

研究成果の概要（英文）：We proposed how to handle the learning items and objectives listed in the "Core Curriculum for Foreign Language (English) in the Elementary School Teacher Training Course" and the "Core Curriculum for Foreign Language (English) in the Middle and High School Teacher Training Course" in the form of a Model Program. To create the Model Program, we verified the validity and effectiveness of the prior implementation of the Core Curriculum, conducted a questionnaire survey of university faculty members, interviewed university faculty members, and examined the syllabi of each university.
　Based on these surveys, we compiled a report on the Comprehensive and Concrete Model Programs, prepared a brochure with the essentials, and sent it to universities with teacher training programs. We also made a presentation at AILA, the world's leading conference on applied linguistics.

研究分野：英語教育学

キーワード：英語教育　教員養成　コアカリキュラム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

1.　研究開始当初の背景

2017 年度及び 2018 年度に告示された学習指導要領においては、小・中・高等学校における英語教育の高度化が図られることとなったが、その実現には指導に当たる教員の英語力・指導力の強化が不可欠である。東京学芸大学は、2015 年度と 2016 年度に「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」を文部科学省から受託し、英語教育専門の大学教員、小学校教員及び中・高等学校英語教員、教育委員会指導主事等を事業メンバーに加え、英語教員の養成・研修のコア・カリキュラムの開発を行った。2016 年度にはその成果として「小学校教員養成課程 外国語（英語）コア・カリキュラム」及び「中・高等学校教員養成課程 外国語（英語）コア・カリキュラム」（以下、コアカリキュラム）、「小学校教員研修 外国語（英語）コア・カリキュラム」「中・高等学校教員研修 外国語（英語）コア・カリキュラム」を発表した。

コアカリキュラムは、大学において学ぶべき項目と到達目標を示し、それらについての解説と一部シラバスの例示を付したものであるが、課題として、①2016 年度版のコア・カリキュラムをさらに深化させ授業に具現化するための情報を得ること、②コア・カリキュラムに基づいた授業を大学において実施し、その妥当性ならびに効果を検証し課題を抽出すること、③それらの検討を踏まえて、シラバス、指導法、評価等を含む具体的なモデル・プログラムを開発すること、の３点が挙げられた。

また、コアカリキュラムは、「外国語／英語科の指導法」及び「外国語／英語科に関する専門的事項」のみを扱っていたが、教職課程においては、「教育実習」や「教職実践演習」等の関連教職科目も含めた科目構成やシラバスデザインを一体的に考える必要があり、「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」によって開発が進められていた「教職課程コアカリキュラム」とも整合させた包括的なモデル・プログラムの開発が求められていた。

2.　研究の目的

小学校教員養成課程、中・高等学校教員養成課程における、①具体的なモデル・プログラム、②包括的なモデル・プログラム（以下 モデルプログラム）を作成することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

3.1　研究メンバー

2015 年、2016 年に「コアカリキュラム」の作成に関わったメンバーのうち、大学で教鞭をとっている 14 人の教員を本研究のメンバーとした。研究メンバーを初等・中等の 2 グループに分け、それぞれの中で分担を行った。定期的に全体会を開催し、研究全体の方向性を確認したうえで、調査の方法や具体的な手順について情報共有を行った。

3.2　4 つの調査

本研究では、4 つの調査を行った。

(1) コアカリキュラムの先行実施と妥当性･効果の検証 調査

【小学校教員養成課程】

4 大学の学生 216 名の協力を得て、「事前テスト－処遇－事後テスト」のデザインを用いた検証を行った。2018 年度後期の「外国語の指導法」に該当する科目において、15 回の講義の冒頭に事前調査を、15 回の授業終了時に事後の調査を行った。コアカリキュラムの「外国語の指導法」で育成する資質能力に関する 35 問を出題し理解度を測定し、事前と事後の成績を比較した。

その結果、「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」「子供の第二言語習得についての知識とその応用」「授業づくり」の正答率が有意に伸びていた。「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」の正答率が最も低かった。

本調査から得られた知見は、具体的なモデルプログラム作成のための材料となった。

【中･高等学校英語教員養成課程】

6 大学の学生 199 名の協力を得た。オンラインアンケートを行い英語科の指導法に関する項目及び英語科の専門的事項に関する項目の理解度についての自己評価を 5 件法で質問した。また、自己評価の結果を考察するための資料として、英語力向上の取り組み、模擬授業及び教育実習の成果と課題、自分に不足していると考える知識や技術についてなどの項目について質問した。

その結果、英語科の指導法では平均が 3.5 以上だった項目は「次期学習指導要領の 3 つの資質・能力についての理解」「外国語（英語）科の学習指導案を作成することができる」「英語でやり取りすることの指導の在り方について理解し、授業指導に生かすことができる」「五つの領域別の学習到達目標の在り方について理解している」であり、最も低かったのは「年間指導計画の立案の仕方について理解している」（平均：2.50）であった。

英語科の専門的事項では、「英語コミュニケーション」「異文化理解」に関する項目は概ね平均

が 3.5 前後であったのに対し、「英語学」の 3 項目では、「英語の音声の仕組み」「英語の歴史的変遷及び国際共通語としての英語の実態」に関する項目は平均 3.0 程度にとどまり、「英語文学」の 3 項目はすべて平均 3 を下回っていた。

本調査から得られた知見は、具体的なモデルプログラム作成のための材料となった。また、自己評価の結果を考察するための資料として得られた情報は、包括的なモデルプログラム作成に生かされた。

(2) 大学教員対象のアンケート

【小学校教員養成課程】

外国語の指導法、外国語の専門的事項に関する科目の授業運営や指導上の工夫及び問題点・課題に関する情報収集及び、カリキュラムの構成や上記以外の科目における外国語に関する内容の取扱いに関する情報収集を目的として、3 つの調査（①課程の概要調査、②指導法科目に関する調査、③専門的事項科目に関する調査）をオンラインで行った。延べ 92 大学 105 名の教員から回答を得た。

結果として回答者の多くが共通して「コアカリキュラムの内容に対する指導時間の不足」「コアカリキュラムの内容を扱うための学生の英語力の不足」を課題としている姿が浮かびあがった。課題を克服するための工夫についても情報が得られた。

調査①から得られた知見は、包括的なモデルプログラムに、②③から得られた情報は具体的なプログラム作成に生かされた。

【中･高等学校英語教員養成課程】

英語科の指導法、英語に関する専門的事項における授業運営や指導上の工夫及び問題点・課題に関する情報収集及び、カリキュラム構成や上記以外の科目における外国語に関する内容の取扱いなどに関する情報を収集することを目的として、3 つの調査（①課程の概要調査、②指導法に関する調査、③専門的事項に関する調査）をオンラインで行った、延べ 104 大学 148 名の教員から回答を得た。

結果として「受講者の多いクラスへの対応」「授業時間の不足への対応」「学生の英語力やモチベーションの個人差への対応」「模擬授業の実施」「専門的事項と指導法の連携」などの課題があることが分かった。課題を克服するための工夫についても情報が得られた。なお、「専門的事項と指導法の連携」については、本科研で開催された 2 回のフォーラムでもテーマとして扱った。

調査①から得られた知見は、包括的なモデルプログラムに、②③から得られた情報は具体的なプログラム作成に生かされた。

(3)大学教員対象の聞き取り調査

【小学校教員養成課程】

英語科の指導法について、より詳細な事例収集を行うため、合計 13 名の協力者を対象にインタビュー調査を行った。聞き取りの項目は網羅的なものではなく、特に課題が多いと考えられる「大人数のクラスでの指導方法」「学習指導案の作成」「模擬授業の形態・工夫」「模擬授業の評価観点」「模擬授業における『学生が克服するべき課題』」「その他」について重点的に扱った。

結果として、より詳細で具体的な事例を収集することができた。これらの結果は、具体的なモデルプログラム作成に生かされた。

【中･高等学校英語教員養成課程】

英語科の指導法について、より詳細に事例収集を行うため、合計 5 名の協力者を対象にインタビュー調査を行った。また、専門的事項についての事例収集を行うため、英語学の専門家 3 名、英語文学の専門家 2 名、異文化理解の専門家 1 名の協力者を対象にインタビュー調査を行った。中・高等学校の英語教員免許取得のための単位数に鑑み、専門的事項についても扱った。

結果として、より詳細で具体的な事例を収集することができた。これらの結果は、具体的なモデルプログラム作成に生かされた。

(4)授業シラバスの分析

【小学校教員養成課程】

2019 年度に小学校教員養成課程を有する大学のウェブサイトで公開されていた「外国語の指導法に該当する科目」及び外国語の専門的事項に該当する科目」のシラバスを収集し、コアカリキュラムの項目が授業の中で占める割合、全体の傾向、コアカリキュラム以外の内容、工夫がみられる授業や授業外で行われている取り組みについて分析した。

結果として、指導法に該当する科目では、模擬授業を扱う回数が多い傾向にあること、コアカリキュラム以外の内容として特定の指導法や指導者に求められる資質などについて扱われていることがわかった。また専門的事項に該当する科目では、話すことを扱う傾向があること、コアカリキュラム以外の内容として、世界の中の英語や英語の変遷を扱っている事例があった。

これらの結果は、具体的なプログラム作成に生かされた。

【中･高等学校英語教員養成課程】

英語教員養成課程を有する大学のウェブサイトで公開されている、「教科の指導法（多くの大学で 8 単位）」のシラバスを収集し、8 単位の授業のシラバス構成の実態について分析を行った。また、「教科に関する専門的事項」では、英語学（30 大学）、英語文学（17 大学）、異文化理解（18 大学）のシラバスを収集し、コアカリキュラム記載の学習項目に関連する授業実践の参考となるような記述があるかどうか、という観点から内容を確認した。

結果として、教科の指導法のシラバスに見られたいくつかのパターン（言語材料に基づく構成、知識・技能に基づく構成など）を示すことができた。教科の専門的事項についてもモデルプログラム作成の参考になる事例を収集することができた。

これらの結果は、具体的なプログラム作成に生かされた。

4. 研究成果

【小学校教員養成課程　包括的なモデルプログラム】

包括的なモデルプログラムでは「英語力増強の手立て」「授業参観・実践体験との連携」「教育実習との連携」「教職実践演習」の４項目について、調査結果からの知見、取り組みの具体案、解説の３点について報告書で述べた。

例えば「英語力増強の手立て」については、小学校外国語を指導するためには一般的な英語力とは異なる英語運用能力が必要であること、教科の指導法に関する科目の中でのさらなる工夫が期待されることが述べられている。

教育実習や教職実践演習は、特定の教科・領域に特化した内容を扱うのが容易ではない現状があるが、そのような環境下でも、「小学校の公開研究授業を参観した後に討論する」など、実現可能性の高い工夫が示されている。

【小学校教員養成課程　具体的なモデルプログラム】

「指導法に関する科目」、「専門的事項に関する科目」、「英語力向上」の 3 つの領域について具体的なモデルプログラムの提案を行った。「英語力向上」は計画段階では予定していなかった項目だが、調査の結果から喫緊の課題であることが明らかになり、具体的なモデルプログラムを提案することとした。

「指導法に関する科目」については「シラバス」「指導内容」「模擬授業」の 3 項目について、具体案と解説の 2 点について報告書で述べた。「シラバス」の具体例として「授業実践に必要な知識を前半で扱い、後半で指導技術を扱う具体案」「授業のイメージを持たせてから知識の習得を目指し模擬授業を行う具体案」「小学校と連携して授業を行う具体案：小学校での授業観察や小学校教員のゲストスピーカーとしての招へい」など、6 つの具体案を示した。「指導内容」については、時間数に対してコアカリキュラムの項目が多いことから、軽重のつけ方についての具体案が示され、また、各学習項目を扱う際の工夫が示された。適切に軽重をつけるために、身につきやすい項目とそうでない項目について教員が理解していることの重要性が指摘されている。また、学習項目を扱う際の工夫については、授業のイメージをしっかり持たせること、学生の学習経験に基づく思い込みを取り除くことの重要性が共通して示されている。「模擬授業」では、模擬授業の前後及び模擬授業の実施方法についてモデルプログラムを示した。「小学校教員による実際の授業を視聴して模倣する」「ペアやグループで取り組む」といった、限られた時間や大人数クラスに対応できる具体案を示したことの意義は大きいと考えている。　いずれのモデルプログラムも、各大学の実情に合わせ柔軟に運用されることが期待される。

「専門的事項に関する科目」については「シラバス」「英語学」「英語文学」「異文化理解」について具体的なモデルプログラムの提案を行った。専門的事項に関する科目は、多くの大学で 1 単位、もしくは 2 単位の科目として開講することが見込まれ、少ない時数の中でどのようなシラバスを作成するかは、大きな課題といえる。研究の結果を踏まえ、「授業実践に役立つ英語力の向上と専門的な知識の獲得を目標として単独の教員が指導する具体案」「専門分野の異なる教員によるオムニバス形式のシラバスの具体案」「専門的な知識の習得を目指す講義と 4 技能統合型活動を組み合わせた具体案」など、5 つの具体案を提案した。「英語学」については、「実践的な活動を通して、音声、語彙、文構造、文法などに関する基礎的な事項を身に付けさせる」「日本語と英語の違いに着目して指導する」といった具体案を提案した。小学校での学習内容と直接かかわる部分であり、小中連携の視点からも各大学でさらなる工夫が進むことが期待される。「英語文学」については、「児童文学（絵本や子ども向けの歌や詩）の音読活動を取り入れながら指導する」「国語で扱われている児童文学（絵本や子ども向けの歌や詩）を扱う」などの具体案を提案した。小学校の授業で扱える作品に養成段階から親しんでおくことで、教壇に立った時の授業の幅が広がることが期待される。「異文化理解」については、「学習指導要領における異文化理解のとらえ方を軸に据えた具体案」「学生自身の異文化理解に関する知識や態度、価値観をふりかえることを通して考えを深めさせる具体案」を提案した表面的な理解にとどまることなく、将来大切なメッセージを子どもたちに伝えられる教員になってくれることを期待している。　「英語力向上」については、「指導技術の一環として小学校教員にとって必要な英語運用能力を扱う具体例」「小学校で扱う題材を用いる具体例」「指導法・専門的事項の科目で英語資格検定試験の受験を課す具体例」などの例を提案した。さらにそれぞれの具体例について「リキャストの演習を継続的に行う」「英語の歌や早口言葉の演習を行う」「資格検定試験のスコアの目標点を定める」など具体的な方法についても言及している。

【中･高等学校英語教員養成課程　包括的なモデルプログラム】
　包括的なモデルプログラムでは、①「『英語科の専門的事項』と『英語科の指導法』」②「『教育実習事前指導』『教職実践演習』その他の教職科目との連携」③「特別な支援を必要とする生徒への指導」の３項目について具体的な提案を行った。
　まず、①では英語コミュニケーション・英語学・英語文学・異文化理解と英語科の指導法の融合・連携の具体例や指導手順を示した。例えば、英語文学との融合・連携では、*Snowman* (Raymond Briggs 作)というオーセンティックな作品を例に指導手順を紹介している。　②の教職科目との連携では、調査の結果を踏まえ、英語の授業をイメージしやすくする指導、年間を通した目標設定・授業計画・評価計画、の２点について提案している。　③の特別な支援を必要とする生徒への指導では、教科教育において手薄になりがちな指導について具体的な配慮事項を紹介している。

【中･高等学校英語教員養成課程　具体的なモデルプログラム】
　「指導法に関する科目」、「専門的事項に関する科目」、「英語力向上」の３つの領域について具体的なモデルプログラムの提案を行った。
　「指導法に関する科目」については「シラバス」「指導内容」「模擬授業」の３項目について、報告書で述べた。「シラバス」の具体例として、「先に理論をまとめて扱った後、実践を行う具体案」「理論と実践をペアにして進めていく具体案」「校種ごとに行う具体案」の３つの具体案を示し、解説を加えた。「指導内容」については、コアカリキュラムの大項目（「カリキュラム・シラバス」「生徒の資質・能力を高める指導」「授業づくり」「学習評価」「第二言語習得」「授業観察」「授業体験」）の中の学習項目ごとに具体案と解説を示した。どの具体案も共通して、学生同士のディスカッションを多用する提案が多く、大学においても一方的な説明でない授業が求められている実態を反映している。また、たとえば「生徒の資質・能力を高める指導」の中の「英語の音声的な特徴に関する指導」では、「音声学」の授業で学んだ理論の振り返りを促すなど、「専門的事項」の科目との連携が提案されている。「模擬授業」については、大学の状況が多岐にわかり抱える課題も多岐にわたっている点を十分考慮し、「受講者数に合わせた模擬授業実施の具体例」が示された。また、「指導案の作成」「振り返り」についても、調査から得られた知見をもとに具体案と解説が示された。「専門的事項に関する科目」については、「シラバス」「英語学」「英語文学」「異文化理解」の４項目についてモデルプログラムの提案を行った。
「シラバス」の具体例として「英語学」「英語文学」「異文化理解」のシラバスを提案した。いずれも、中学・高等学校の英語の授業でおいてどのように生かせるか、という視点を重視したシラバスとなっている。「専門的事項に関する科目」は 20 単位以上履修する必要があり、これは「指導法に関する科目」（8 単位程度以上）の倍以上である。「専門的事項に関する科目」が教員養成段階で果たす役割は大きい。「英語学」の内容については、コアカリキュラムの学習項目「英語の音声の仕組み」「英文法」「英語の歴史的変遷、国際共通語としての英語」の３項目について、具体的な提案と解説を行うとともに、調査の結果等から得られた「参考図書」の紹介も行った。いずれも､学生同士のディスカッションを重視している点､上質な視聴覚資料を使用している点、実践的な練習や発表を重視している点が共通している。「英語文学」の内容については、コアカリキュラムの学習項目「文学作品における英語表現」「文学作品から見る多様な文化」「英語で書かれた代表的な文学」の３項目について、具体的な提案と解説を行うとともに、調査の結果等から得られた「参考図書」の紹介も行った。学生の興味・関心や過去にふれてきた文学作品についての情報収集を重視すること、受動的な「読み」で終わらないよう配慮すること、映像も使うなどメディアの多様性を持たせること、教員の専門分野に偏らずに作品を選ぶことの重要性に配慮した提案となっている。「異文化理解」の内容については、コアカリキュラムの学習項目「異文化コミュニケーション」「異文化交流」「英語が使われている国・地域の歴史・社会・文化」の 3 項目について、具体的な提案と解説を行うとともに、調査の結果等から得られた「参考図書」の紹介も行った。特に「異文化交流」については実施方法について情報が求められており、具体的な方法について提案されたことの意義は大きい。中学・高等学校の英語授業で扱われている教材を用いた具体例も紹介されている。　「英語力向上」については、「指導法・専門的事項の科目での取り組み」「指導法・専門的事項以外での取り組み」の２項目について、具体的な提案を行った。「指導法・専門的事項の科目での取り組み」として、「指導技術の一環として、授業を行う際に必要となる英語運用能力を扱う具体例」「将来、英語の授業を行う際に生徒に行わせることが想定される英語の言語活動を体験させる具体例」「指導法・専門的事項の科目で英語資格検定試験の受験を課す具体例」の３つの提案を行った。教室場面で必要となる英語力を意識している点、学生自身に英語力向上は重要であることを意識させる強い意図がある提案となっている。「指導法・専門的事項以外での取り組み」として、「他の科目との連携の具体例」「授業外での取り組み具体例」の２つの提案を行った。教育実習の要件として英語の資格検定試験の一定水準以上のスコアを設定している例なども
紹介されている。
　学習指導要領が改定され、中等教育において生徒が身に付けるべき英語力は高くなっている。将来指導者となる学生の英語力向上は、どの大学にとっても大きな課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計18件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 川上典子	４．巻 28
２．論文標題 中学校英語教科書に見る小中連携	５．発行年 2022年
３．雑誌名 鹿児島純心女子大学人間教育学部紀要	６．最初と最後の頁 17‐29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 萬谷 隆一・堀田 誠・鈴木 渉・内野 駿介	４．巻 22
２．論文標題 小学校英語に関する先行研究の収集と統合	５．発行年 2022年
３．雑誌名 JES Journal	６．最初と最後の頁 200-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 柏木 賀津子・山下 桂世子・鈴木 渉・北野 ゆき・中田葉月	４．巻 22
２．論文標題 エビデンスベーストの英語の読み書き－小学校外国語を支える10回パッケージ文字指導	５．発行年 2022年
３．雑誌名 JES Journal	６．最初と最後の頁 184-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 阿部始子	４．巻 20
２．論文標題 国際理解教育を取り入れた小学校外国語科の授業 －児童の学びの広がりと相互文化的コミュニケーション能力に焦点を当てた実践研究－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 JES Journal （小学校英語教育学会誌）	６．最初と最後の頁 68-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Noriko Kawakami	4．巻 7
2．論文標題 Current Situation in ELES in Japan, Korea, Taiwan: Teacher Training and Future Prospects	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Studies in English Teaching and Learning in East Asia	6．最初と最後の頁 122-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 鈴木渉	4．巻 68巻8号
2．論文標題 学習者の誤りは訂正すべきかすべきでないかーそれは問題ではない！？	5．発行年 2019年
3．雑誌名 英語教育	6．最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 阿野幸一・太田洋	4．巻 68巻第4号
2．論文標題 担任の先生だからこそできる必然性のある外国と・外国語活動の授業	5．発行年 2019年
3．雑誌名 英語教育	6．最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹内理	4．巻 68巻第3号
2．論文標題 ストラテジー研究の「これまで」と「これから」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 英語教育	6．最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 粕谷恭子	４．巻 第68巻第９号
２．論文標題 無理のない英語教育改革のために校長先生に期待すること	５．発行年 2018年
３．雑誌名 小学校時報	６．最初と最後の頁 4－8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 内野駿介・酒井英樹・菊原健吾	４．巻 22巻
２．論文標題 教職に関する科目（各教科の指導法に関する科目）の「英語科指導法基礎」における外国語（英語）コア・カリキュラムの点からの学び	５．発行年 2018年
３．雑誌名 JABAET Journal	６．最初と最後の頁 35-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木　渉	４．巻 10巻
２．論文標題 中学生に最適な文法の指導法－SLAの観点から－	５．発行年 2018年
３．雑誌名 英語教育	６．最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ikeda, M., Imai, H., and Takeuchi, O.	４．巻 書籍収録論文
２．論文標題 An innovative approach to in-service teacher training for teaching English at Japanese public elementary schools.	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Innovation in language learning & teaching: The case of Japan. H. Reinders, S. Ryan, & S. Nakano (Eds.).NY: Palgrave Macmillan.	６．最初と最後の頁 257-283
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-3-030-12567-7	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Mizumoto, A., & Takeuchi, O.	4．巻 書籍収録論文
2．論文標題 Toward modelling of a prototype use of language learning strategies with decision-tree based methods	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Language learning strategies and individual learner characteristics: Situating strategy use in diverse contexts.R.L. Oxford & C. M. Amerstorfer (Eds.).London: Bloomsbury	6．最初と最後の頁 99-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 M. Grogan, M. Lucas, & Takeuchi, O.	4．巻 書籍収録論文
2．論文標題 Encouraging and motivating vocabulary development.	5．発行年 2018年
3．雑誌名 The TESOL Encyclopedia of English Language Teaching.M. DelliCaprini (Ed.).London: Wiley-Blackwell	6．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/9781118784235.eelt0728	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 太田　洋	4．巻 第67巻
2．論文標題 誌上研修　中学校英語お悩み相談	5．発行年 2018年
3．雑誌名 英語教育	6．最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川上典子	4．巻 第２号
2．論文標題 小学校教員を対象とする中学校英語教諭2種免許状講習の成果	5．発行年 2018年
3．雑誌名 鹿児島純心女子大学「教職センター報」	6．最初と最後の頁 14-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 阿野幸一	4．巻 第64巻11月号　通巻767号
2．論文標題 中学校外国語　教科書題材を活かした深い学び－発問を通して生徒の思考を深める－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 指導と評価	6．最初と最後の頁 31-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 臼倉美里	4．巻 3号
2．論文標題 教科化のその先 中高の英語教育はどう変わる？	5．発行年 2018年
3．雑誌名 TOTAL ENGLISH 小学校英語通信	6．最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計17件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 川上典子
2．発表標題 新学習指導要領に沿った評価の在り方
3．学会等名 第4回宮崎公立大学英語教育フォーラム2021（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 川井 一枝・栄利 滋人・鈴木 渉
2．発表標題 タブレットを用いたチャンツ暗唱の自己評価：児童は自分のパフォーマンスをどのように捉えているか
3．学会等名 小学校英語教育学会関東・埼玉大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 Kyoko Kasuya, Tetsuto Baba
２．発表標題 he Newly Introduced National Core Curriculum for Pre-Service English Teacher Education in Japan: Developing Comprehensive Model Programs
３．学会等名 AILA
４．発表年 2021年

１．発表者名 阿部始子
２．発表標題 国際理解教育と小学校英語教育を結ぶカリキュラムの提案―知識・スキル・態度はどのように育つのか―
３．学会等名 第19回小学校英語教育学会（ＪＥＳ）北海道大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 内野駿介
２．発表標題 『外国語に関する専門的事項』及び『外国語の指導法』の科目を通した学生の変容―理解度の自己評価と英語力の点から―
３．学会等名 第1回英語教員養成コアカリキュラム研究フォーラム
４．発表年 2019年

１．発表者名 Noriko Kawakami
２．発表標題 Current Situation in ELES in Japan: Teacher Training and Future Prospects
３．学会等名 JACET九州沖縄支部　東アジア研究会第200回記念大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 工藤洋路 太田洋 阿野幸一 日臺滋之
２．発表標題 教育実習の実態調査～2年間の調査結果からの英語教員養成課程への示唆～
３．学会等名 第31回(設立30周年記念)全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kyoko Kasuya, Tetsuo Baba, Wataru Suzuki, Shunsuke Uchino, Ryuichi Yorozuya, Hideki Sakai
２．発表標題 Is the National Core Curriculum for Teaching English in Pre-service Training Effective?:A Validation of Elementary School Teacher Course
３．学会等名 The 17th Asia TEFL（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 粕谷恭子
２．発表標題 「英語教員養成・研修コア・カリキュラム」のビジョンとその実現に向けて
３．学会等名 第44回全国英語教育学会京都研究大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 鈴木渉・齋藤玲・川井一枝
２．発表標題 新学習指導要領に見られる小・中学校の英語教育の特徴―計量テキスト分析による可視化―
３．学会等名 第18回小学校英語教育学会長崎大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 池田真生子、今井裕之、竹内　理
２．発表標題 小学校教員の英語指導に対する不安の変動―学校内研修を通して
３．学会等名 小学校英語教育学会（JES)長崎大会（長崎：長崎大学）
４．発表年 2018年

１．発表者名 竹内　理
２．発表標題 誰が何を見ればよいのだろうか―英語授業改善の具体的視点を考える
３．学会等名 大学英語教育学会（JACET）第45回サマーセミナー（京都：京都府立大学）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 岩坂泰子・阿部始子
２．発表標題 社会的アプローチの視点から見た児童の意味解釈の過程―難民問題をテーマとした外国語学習を通して―
３．学会等名 第44回全国英語教育学会京都研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 酒井英樹
２．発表標題 教員養成における課題と展望：コア・カリキュラムを踏まえて
３．学会等名 日本児童英語教育学会（JASTEC）　第 39 回全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中野達也
２．発表標題 模擬授業ビデオを視聴して 自身の授業力向上を目指した英語
３．学会等名 全国英語教育学会　第４４回　京都研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 工藤洋路・太田洋・阿野幸一・日臺滋之
２．発表標題 英語教職課程の学生の教育実習の実態調査―大学での指導と実習校での実践の矛盾―
３．学会等名 英語授業研究学会全国大会（第30回記念大会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 光田怜太郎，臼倉美里
２．発表標題 発信力・対話力の向上を目指した高大連携の英語授業プログラムの開発
３．学会等名 関東甲信越英語教育学会　第42回栃木研究大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計6件

１．著者名 中田達也・鈴木祐一・濱田陽・門田修平・濱田彰・神谷信廣・新谷奈津子・新多了・廣森友人・鈴木渉・佐々木みゆき	４．発行年 2022年
２．出版社 研究社	５．総ページ数 230
３．書名 英語学習の科学	

１．著者名 鈴木渉・西原哲雄	４．発行年 2019年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 224
３．書名 小学校英語のためのスキルアップセミナーー理論と実践を往還する	

１．著者名 池田真生子、今井裕之、竹内理	４．発行年 2019年
２．出版社 Palgrave Macmillan	５．総ページ数 257-282
３．書名 An innovative approach to in-service teacher training for teaching English at Japanese public elementary schools. In H. Reinders, S. Ryan, & S. Nakano (eds.), Innovation in language learning & teaching The case of Japan	

１．著者名 鈴木渉・巽徹・林裕子・矢野淳（著）中村典生（編）	４．発行年 2019年
２．出版社 東京書籍	５．総ページ数 303
３．書名 コア・カリキュラム対応 小・中学校で英語を教えるための必携テキスト	

１．著者名 湯川笑子（編著）	４．発行年 2018年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 195
３．書名 新しい教職教育講座　教科教育編10　初等外国語教育	

１．著者名 酒井英樹・廣森友人・吉田達弘編著	４．発行年 2018年
２．出版社 大修館書店	５．総ページ数 319
３．書名 「学ぶ・教える・考える」ための実践的英語科教育法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	馬場　哲生 (Baba Tetsuo) (00198946)	東京学芸大学・教育学研究科・教授 (12604)	
研究分担者	酒井　英樹 (Sakai Hideki) (00334699)	信州大学・学術研究院教育学系・教授 (13601)	
研究分担者	阿部　始子 (Abe Motoko) (00449951)	東京学芸大学・教育学部・准教授 (12604)	
研究分担者	臼倉　美里 (Usukura Misato) (00567084)	東京学芸大学・教育学部・准教授 (12604)	
研究分担者	高山　芳樹 (Yoshiki Takayama) (10328932)	東京学芸大学・教育学部・教授 (12604)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	萬谷　隆一 (Yorozuya Ryuichi) (20158546)	北海道教育大学・教育学部・教授 (10102)	
研究分担者	太田　洋 (Ohta Hiroshi) (30409825)	東京家政大学・人文学部・教授 (32647)	
研究分担者	竹内　理 (Takeuchi Osamu) (40206941)	関西大学・外国語学部・教授 (34416)	
研究分担者	鈴木　渉 (Susuki Wataru) (60549640)	宮城教育大学・教育学部・教授 (11302)	
研究分担者	阿野　幸一 (Ano Koichi) (70400596)	文教大学・国際学部・教授 (32408)	
研究分担者	中野　達也 (Nakano Tatsuya) (70784338)	駒沢女子大学・人文学部・教授 (32696)	
研究分担者	内野　駿介 (Uchino Syunsuke) (80825456)	北海道教育大学・教育学部・特任講師 (10102)	
研究分担者	川上　典子 (Kawakami Noriko) (90310060)	鹿児島純心女子大学・人間教育学部・教授 (37704)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関